慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160−8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時〜午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

18年度 入学式を挙行

医学部100名が入学

四月三日、平成十八年度慶應義塾大学入学式が日吉記念館にて行われた。式典は、午前十時定刻の開式に伴い、学事報告、塾長式辞、学部長紹介、教職員代表、塾員代表の祝辞、新入生代表による入学の辞、卒業五十周年記念三田会寄付目録贈呈・挨拶、最後に参加者全員が起立して塾歌斉唱を行い、式は滞りなく終了した。なお、本年度前期の入学者数は全九学部で六、五二一名、うち医学部は一〇〇名、看護医療学部は一〇四名であった。

入学式当日、前日の雨が嘘のように雲ひとつなく晴れ渡り、新入生の新しい一歩を祝うのに相応しい天候となった。そして、式典の時間が近づくにつれ、日吉キャンパスの銀杏並木は、新入生とその保護者および関係塾員でいっぱいとなった。

式典はまず、西村太良常任理事による学事報告があり、各学部の入学者数が報告された。

「想像力」「実行力」「慶應義塾の精神」を磨こう

安西祐一郎塾長・式辞

続いて安西祐一郎塾長が式辞を述べた。塾長は新入生の入学を祝うとともに、心に留めておいて欲しい三点について、即ち「想像力」「実行力」「慶應義塾の精神」を磨いて欲しいと述べた。つまり、「想像力」としては人口減少・国際化など様々な時代の流れの問題に対して、多くの書物・人・体験から感動を得て磨いて欲しいということ。「実行力」としては、慶應義塾という妙なこだわりのない環境で、たくさんの知らない人たちと出会う中で、想像するだけでなく、それを実行へと移して欲しいとした。「慶應義塾の精神」としては、もうすぐ一五〇周年を迎えるが、義塾はアジアで稀にみる民主導で進めてきた歴史ある学塾であり、独立自尊の精神を持ち、自分を含め、人を卑しめない人間になって欲しいと説き、「それら全ては多くの人が持つべきものであり、君達がリードしてもらいたい」として話を結んだ。

次いで述べられた祝辞では、教職員代表・鷲見洋一文学部教授が、サン＝テグジュペリ著「星の王子様」を例に挙げ、〝なつける〟とは、対等の関係の上で絆を作ることであり、慶應社中でお互いをなつけて欲しいと説かれた。また、塾員代表・小林陽太郎富士ゼロックス株式会社相談役最高顧問は、慶應の歴史をふり返る中で、社中の一員として「誇り」を持ち、社会への「責任」を持って欲しいとし、「日本、義塾の将来にとって君たちは希望の星である」と力強い期待を込めた。

さらに、新入生代表・法学部横澤慶太君は入学の辞として、個性をお互いに尊重して認め合い、豊かな人間生活の構築をしていきたいと述べ、義塾の一員として、新たな一歩を踏み出すにあたっての決意を高らかに宣言した。

（二年・朝倉崇徳）

井上和雄常任理事 ●インタビュー●

井上和雄常任理事

二〇〇八年に迎える創立一五〇年記念――これはアジアの中でも初の事例となる誇るべき素晴らしい実績である。しかしながら、直面する問題も多い。大学改革の柱となる財政と経営問題があり、医学部においては、新病棟建設問題もその核である。これにおいては、本紙の新春座談会において、義塾としても、医学部・三四会としても、その根本は同じ考えであることを確認することができた。ハードもソフトも改革が必要な時に来ている大学運営について義塾全体としての現状を知り理解を深めることにより、医学部の進むべき方向がよりクリアに見えてくるであろう。そこで今回は全塾の経営改革の中枢を担う井上和雄常任理事にお話を伺った。

信濃町リノベーション

創立150年を見据え ドラスティックな経営改革が必須

〈第一章〉

編集部　これまで消費支出超過は医学部だけのことと考えていたところ、塾の経営が明らかにされて、実は全塾的な問題であることがわかりました。正しい情報公開と部門別収支管理の試みは変革のまさに第一歩であったと思いますが、塾の財政状況を少し解説願えますでしょうか。

私は昨年五月末から命を受けまして、塾のほうへ通わせていただいております。当初、五十年ぶりの学校通いで、さらに経営改革プロジェクト室長という大任をあずかり少々とまどいましたが、企業経営の目で経理・財務面のお手伝いをさせていただくということになりました。少しでも母校のためにお役に立てましたら嬉しく思います。

着任する前から進められていた経営に関する調査報告を拝見して大変驚きました。私も企業の経営に携わって参りましたが、このような消費支出超過状態が続きましたら大変です。それが九年も続いております。最も大きな消費支出超過額は約百十六億でした。平成十七年度予算は九十四億の消費支出超過です。民間ではありえない状況ですので本当に驚いてしまいました。これは何とかしていかないと…と。幸いにして、大きな借り入れなどはございませんので、今後の改革と努力で改善できるものと考えております。

昨年十一月の教授会においておきましてこの経営問題について皆様の前でお話させていただきましたけれども、皆様真摯にこれをお聞きいただき、受け止めていただきました。

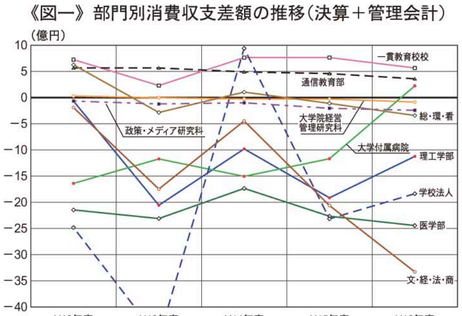
消費支出超過は医学部だけに限りません。現在、ご覧の通り（図一）ほとんどの部門が消費支出超過であり、平成十七年度予算では義塾全体で年間九十四億の消費支出超過となっております（2面の表一・十七年度全塾）。

今まで学校会計ではこのように管理会計的な部門ごとの収支を提示するという仕組みはありませんでした。今これができますのは前任の経営改革プロジェクト室長であった吉田常任理事のご努力でありますが、この管理会計を今後さらに精度を高め、各部門の成果・努力度を客観的に掴んでいきたいと考えております。

古い学部ほど厳しい現実がわかります。歴史が長くなり、大きな母体となりますと、どうしても澱が溜まって参ります。いま国レベルでも、社会全体がそのような問題と直面しております。大学改革も例外ではありません。仕事を変えてゆくか、改革してゆくかが共通の課題とされています。

経営改革プロジェクトとしては「総合改革プラン二〇〇二〜二〇〇六」の目標の一つである財政基盤の強化を図るべく全塾教職員の方々に説明して参りました。平成十八年度予算では、病院と医学部の合計で、消費収支差額をマイナス十五億に収めることができました。信濃町は皆様のご尽力によりその成果が大きく現れてきております。

《図一》部門別消費収支差額の推移（決算＋管理会計）



（2面につづく）

後期卒後臨床研修について

医学部長　池田　康夫

新臨床研修制度が始まってからの各教室の最大の関心事は、後期卒後臨床研修医すなわち専修医がどのくらい応募してくるかということではなかったであろうか。ふたを開けてみると地方の大学への応募者数が激減している中、幸いにして慶應義塾大学医学部は専修医一年次に百五十名を採用することが出来た。専修医制度は平成十八年度から従来の制度に加えて、新しい制度も動きだした。新制度では百五十名、旧制度では三名を迎えている。

慶應の専修医制度の基本的な概念は、臨床、研究、教育において慶應大学医学部と多くの関連施設を支えていく人材を確保していくために幅広い採用が必要であることから、各領域の専門医の資格を取得できる教育であること、さらに慶應として独自の特色ある研修プログラムを構築していくことなどを柱とした。

研修医課程の二年間は研修医という身分であるが、後期臨床研修では新たに「助手（専修医）」としての採用となり、教員としての身分を有することとなる。専修医課程は原則として四年間とし、臨床医学系の教員として、教育、研究、診療を担うこととなる。主として診療活動に重点を置く「医学部助手（専修医）（診療）」、主として研究とりわけ臨床研究活動に重点を置く「医学部助手（専修医）（臨床研究）」、教育関連病院に出向する「医学部助手（専修医）（出向）」の三種類に分かれる。平成十七年八月の教授会で決定された有給枠数に基づいて、「医学部助手（専修医）（診療）」には平成十八年度は年間四百万円が給与として支払われることとなった。また、社会保障にも加入することとなる。「医学部助手（専修医）（臨床研究）」は実質的に無給医となるが、「医学部助手（専修医）（診療）」の身分と期間を区切って交代することにより、出来るだけ専修医間で差ができないよう調整をお願いしているところである。二年目以降については現在検討中であるが、四年間の内、二年間を有給とし、残りの二年間を関連施設への出向として、出向先から給与をもらう仕組みを考えている。また、平成十九年度からは大学院生と専修医の重複在籍を認める方向で検討している。

反省点は、平成十八年度については具体的な検討が執行部の交代後から始まったため、検討に十分な時間が取れなかった点である。この反省に基づいて、平成十九年度以降について、独自のより魅力あるプログラムとなるよう現在鋭意検討しているところである。

平成18年度専修医就任者数

所属	専修医1年次就任者数		
	新制度	旧制度	
内科学	20	0	＊
外科学	21	0	
麻酔学	4	0	
整形外科学	12	0	＊
形成外科学	5	0	＊
小児科学	15	0	＊
産婦人科学	12	1	＊
眼科学	10	1	
皮膚科学	8	0	
泌尿器科学	5	0	
耳鼻咽喉科学	7	0	
精神・神経科学	15	0	
放射線科学	5	0	＊
歯科・口腔外科学	6	0	＊
リハビリテーション医学	1	1	
救急部	4	0	
中央臨床検査部	0	0	
病理診断部	0	0	
総計	150	3	

＊5月1日付就任14名
（内科学1名、整形外科学1名、形成外科学1名、小児科学3名、産婦人科学1名、放射線科学1名、歯科・口腔外科6名）

新5年生一人ひとりに

白衣式　ゴールド夫妻を迎え

さる四月一日、北里講堂にて白衣式が行われた。白衣式は、いよいよ患者さんの元で臨床実習が始まる新五年生に一人一人白衣が授与される式典で、医師になる最終段階の臨床実習に進むにあたり、医師をめざすものとしての心構えを新たにする式典である。この式典は、アーノルド・ゴールド　コロンビヤ大学教授により一九九三年にコロンビヤ大学で初めて執り行われたのを契機に全米に広がり、現在では北米の九四％の医学部で行われている。この試みを強くバックアップし全世界に普及を進めているのが氏の創設したゴールド財団である。財団は医療におけるヒューマニズムを推し進めるために一九八八年ゴールド氏により設立された。

昨年来、慶應で白衣式を計画していたところ、ゴールド財団からアジア地区で初めてとなる五〇〇〇ドルの助成が得られた。白衣式の式典には池田医学部長、相磯、末松、武田学部長補佐、相川病院長、比企三四会長に加え、来賓としてゴールド夫妻も参加された。多数の教員の方々にも参加して頂いた。新五年生に加え、ご父兄も多数参加された。新五年生は一人一人の名前と慶應のエンブレムの刺繍された白衣を医学部長らから授与された。式典では、医学の父と呼ばれる古代ギリシャの医聖ヒポクラテスの教え、福沢先生が医師に励ましの気持ちを込め送られた贈医の七言絶句（第一会議室に福沢先生が揮毫された真筆がかかっている）、慶應病院の理念が紹介された。

新五年生の全員が新しい白衣に身を包みながら、患者さんのことを第一に考える思いやりのある医師になることを誓って式典を終えた。

◆ 慶應医学会例会 ◆

下記のとおり例会を開催いたしますので、ふるってご来聴くださいますようお願い申し上げます。

記

日　時　平成18年5月9日（火）午後5時30分
場　所　新棟11階　臨床講堂兼大会議室
演　題　Infant and child mental health for Pediatricians.
演　者　Neil Boris, MD.
Tulane University
U.S.A.
担　当　小児科学教室
責任者：高橋　孝雄　教授
担　当：渡辺　久子　先生
（内線62365）

以上

主催　慶應医学会
共催　慶應医師会
The Keio Journal of Medicine

鑑往知来

七八・六四、八五・五九これはご存じ世界一を誇る日本の男女平均寿命（〇五年）である。では日本人の一〇〇歳以上の数はご存じであろうか？最新統計（〇四年）で、何と二五、五五四人。四〇年前は、たった一五三人と言うから驚く。更に最後まで介護の世話も受けず、ある日ころっと逝ける事を目指す「PPK（ピンピンコロリ）運動」が流行と言うが、所謂「健康寿命」だって実は世界一なのである。

一方世界で最も平均寿命が低い国は、アフリカの小国スワジランドで何と三五歳（〇三年）！紛争や飢饉の影響と思われるが、平均寿命五〇歳以下の国が現在でも二七カ国に及ぶと言うから、日本の長寿ぶりはすごい。

ではこの長寿日本の医療は、かくあるべきか？「人の命は地球より重い」「一分一秒でも命の火は消すな」と教えられてはきたが、人はまた必ず死を迎えるのも真理。大学を離れて約二〇年、地域医療にどっぷり浸かっているとふと思う。死の現実の前には、医者は何と無力なのだろうと。

世界に比類無き超高齢社会の日本だからこそ、そろそろ医師も死というゴールを正面に見据え、死の質を高める為に何が出来るのか、否何をすべきかを真剣に考える時がきたのではないか。医師の専門性を生かし「生」の質を高める為にも、「死の看取りの医学」を学問として磨いていくべきでは？と感じている。

そうしなければいつまでたっても、医師はどんな病気でも確実に診断治療出来る全知全能の神にも近い存在という国民からの幻想に悩まされ続け、つまらない訴訟が横行したり、最近騒がせている医療行為による医師の逮捕劇や、独りよがりの尊厳死事件がおきてしまうのではないだろうか。

臨床医学の最高学府と信じる塾医学部だからこそ、最先端医学と共に今「死の臨床医学」の教育研究にも大いに先見性を発揮して頂けたらと期待している。

池端幸彦（日本療養病床協会常任理事・福井県医師会理事　59回）